博士学位論文審査要旨

２０１５年1月７日

論文題目：　乳幼児期におけるふりの発達に関する検討
　　－母親の働きかけから子ども主体のふりの確立へ－

学位申請者：　伴　碧

審査委員：

主　査：　心理学研究科　教授　内山伊知郎

副　査：　心理学研究科　教授　中谷内一也

副　査：　心理学研究科　教授　興津真理子

要　　旨：

本稿では，乳幼児期の社会性発達の基盤となるふり遊びを促す母親の働きかけについて論じている。遊びにおける母親の役割の重要性は，ふり遊び以外の他の遊びにおいても指摘されているが(e.g., Bruner, 1975)，ふり遊びにおける母親の働きかけを実験的に検討した研究は少ない。そこで，母親の働きかけが実際に子どものふりに及ぼす影響について，18ヵ月児から30ヵ月児の母子を対象に実証的に検討した。

ふり遊びにおける“ふり”とは，物Aを物Bの代用品として用いる，または，人物Aが人物Bの役割を引き受け，人物Bとして行為する，あるいは状況Aがあたかも状況Bであるかのごとくみなされて，それらの条件のもとで特定の行為が演示されることをいう(高橋, 1996)。

研究1では，日本の母親におけるふりシグナルの検討を行った結果，ふり行動や笑顔といったLillard & Witherington(2004)が明らかにしたふりシグナルに加え，日本特有の働きかけとして，オノマトペ（擬音語・擬態語）が同定された。次に，母親のふりシグナルが，実際に子どものふりに影響を及ぼしているかについて検討を行った結果，母親の働きかけが少ないほど，子どものふりが促されることが示された。

研究2では2歳まで対象を広げ，子どものふりの発達に応じた母親のふりシグナルについて検討を行った。その結果，18ヵ月において，母親のふりシグナルが多く表出され，子どものふりが増加した24ヵ月，30ヵ月にかけては，母親のふりシグナルは減少していた。このことから，母親はふりシグナルを子どものふりの発達にあわせて調整していることが示唆された。

研究3では18ヵ月児，24ヵ月児，30ヵ月児の子どもを対象に，子どものふりを促すための要因である大人側のふりシグナルが，実際に子どものふりに影響を及ぼしているかについて，ふりシグナルの要因を統制した実験的検討を行った。その結果，母親のふりシグナルは18ヵ月児，24ヵ月児のふりを促していることが明らかとなった。他方，30ヵ月児になると，ふりを理解でき，ふりシグナルは子どものふりに影響しないことが示された。

研究4では，子どものふりを促す具体的なふりシグナルについて検討した。大人の模倣が出来ないふり課題を子どもに実施した。その結果，子どものふりを促す具体的な母親のふりシグナルとして，ふり行動，オノマトペが有効であることが示唆された。

本研究において，新たに“オノマトペ”がふりシグナルとして示された。つまり，日本の母親は直接的なふり行動だけではなく，オノマトペを用いた働きかけを行うことで乳児のふりを促していると言える。

以上のように、一連の厳密な実証的な研究で，乳幼児期におけるふりの発達と母親のふりを促

すシグナルについて明らかにした研究と評価できる。よって、本論文は、博士（心理学）（同志社大学）の学位を授与するにふさわしいものであると認められる。

総合試験結果の要旨

２０１５年1月７日

論 文 題 目：　乳幼児期におけるふりの発達に関する検討
　　－母親の働きかけから子ども主体のふりの確立へ－
学位申請者：　伴　碧
審 査 委 員：
　主　査：　心理学研究科　教授　内山伊知郎
　副　査：　心理学研究科　教授　中谷内一也
　副　査：　心理学研究科　教授　興津真理子

要　　旨：
上記審査委員３名は、2014年12月24日午後１時10分から約50分に及ぶ博士論文公聴会の後、約２時間にわたり、学位申請者に面接試問を実施した。提出された論文に対する質疑に対して、適切な応答と説明がなされ、本論文の学術的な価値が確認された。また、乳幼児期の発達に関する心理学はもとより、心理学全般にわたる専門的な知識を十分に有することが確認された。また、引き続き実施した語学試験（英語）についても十分な学力を有することが確認された。
よって、総合試験の結果は合格であると認める。

署名　　主　査：内山伊知郎　　印
　　副　査：中谷内一也　　印
　　副　査：興津真理子　　印

博 士 学 位 論 文 要 旨

論 文 題 目： 乳幼児期におけるふりの発達に関する検討－母親の働きかけから子ども主体のふりの確立へ－

氏　　名： 伴　碧

要　　旨：

幼児期におけるごっこ遊び研究は，他者の行動から意図や感情を推測する能力である心の理論を促すうえで重要である。ごっこ遊び（“group pretend play”または“social or collaborative pretend play”）は，名前の通り，複数の子ども同士で行われる遊びであり，遊びを展開する上で，高い社会性やコミュニケーション能力，言語能力が求められる。そのため，他者とコミュニケーションを取ることが苦手な子どもの遊びのなかでは，ほとんどごっこ遊びはみられない（e.g., Baron-Cohen, Leslie & Frith, 1985）。心の理論の獲得を促すために，子どものごっこ遊びは重要であるが，ごっこ遊びは本来子ども同士で行われる遊びであるため，保育者など大人の介入が難しいとされている。

そこで，本研究では，ごっこ遊びの発達的前段階であるふり遊び（pretend play）に注目した。子ども同士で行われるごっこ遊びとは異なり，18 ヵ月児からはじまるふり遊びは，大人と子どもとの間で行われる。そのため，大人による介入がしやすいというメリットが挙げられる。また，ふり遊びそのものが子どもの発達を促すという知見も示されている（e.g., Lillard, Lerner, Hopkins, Dore, Smith, & Palmquist, 2013）。以上の理由から，ごっこ遊びの土台となるふり遊びに注目することにより，ごっこ遊びへの円滑な移行が可能となるだけではなく，ごっこ遊びをすることが苦手な子どもの支援にもつながると考えられる。なお，この“ふり”とは，物 A を物 B の代用品として用いる，または，人物 A が人物 B の役割を引き受け行為する，あるいは状況 A があたかも状況 B であるかのごとくみなされて，それらの条件のもとで特定の行為が演示されることをいう（高橋, 1996）。

18 ヵ月児からはじまるふり遊びは，母親など身近な大人からの働きかけにより促されるという立場と（e.g., Lillard & Witherington, 2004），子どもは 18 ヵ月までに萌芽的な心の理論を獲得しており，その初期の現れとしてふりが表出される（Leslie, 1987）という異なる 2 つの立場から研究がなされている。しかし，どちらの立場がより有力なのか，未だに結論は出ていない。そこで本研究では，まず，両者の立場からの検討を行い，18 ヵ月児のふりは，萌芽的な心の理論の獲得，および母親の働きかけのどちらの要因がより有力なのかについて検討を行った。

Leslie（1987）は，子どものふりは，子ども自身の心の理論の獲得によるものだと主張している。そこで，研究 1-1 ではまず，萌芽的な心の理論を獲得している 18 ヵ月児の選定を行った。次に，ふりにおける大人の働きかけ（以下，ふりシグナル）について，日本の母親におけるふりシグナルの同定を行った。その結果，先行研究（Lillard & Witherington, 2004）同様に，ふり遊びにおける具体的なふり（e.g., 空のコップに水が入っているかのように飲む行動）であるふり行動や，笑顔といったふりシグナルが同定された。さらに，日本の母親特有のふりシグナルとして，オノマトペ（擬音語・擬態語）が同定された（研究 1-2）。そのうえで，研究 1-3 では，18 ヵ月児のふりは，子どもの萌芽的な心の理論の獲得によるものか，あるいは，母親のふりシグナルによって促されたものであるか，相対的にどちらの影響が子どものふりに強く影響しているか検討を行った。その結果，子どものふりに強く影響を与えていたのは，萌芽的な心の理論の獲得ではなく，母親のふりシグナルであることが示された。しかし，その影響は正ではなく，負であった。つまり，母親のふりシグナルが少ないほど，子どもはふりを多く行うことが示された。

子どもは，大人からの働きかけによってふりを発達させていく（e.g., 麻生，1996）。実際，母子の遊びについて，Belsky, Goode & Most（1980）は，母親が積極的に遊びに介入したほうが，子どもの遊びが促されることを示唆している。しかし，その一方で，Bruner（1975）は，母親は子どもの遊びを促すために，積極的な働きかけを行うのではなく，子どもの行動や表情を読み取りながら，子どもの遊びに合わせた働きかけを行うことを示唆している。Bruner（1975）はこのような母親の働きかけを，遊びの“足場づくり（scaffold）”と定義している。つまり母親は，子どもの遊びを促すために，時として援助的，補助的な役割をとっているのである（戸田，1996）。研究 1-3 で，母親の働きかけが少ないほど子どものふりが促される結果となったのは，萌芽的な心の理論を獲得していた 18 ヵ月児を対象としたため，子どもは十分にふりが出来ていた可能性が推察される。そのため母親は，積極的な働きかけではなく，子どものふりの発達に合わせた補助的な役割をとっていた可能性が挙げられる。

そこで，研究 2 では子どものふり遊びがピークを迎える 30 ヵ月まで対象を広げ，子どものふりの発達に応じて，母親はふりシグナルを変化させているかについて検討を行った。その結果，子どものふりは 18 ヵ月児よりも，24 ヵ月児，30 ヵ月児において増加したが，母親のふりシグナルはそれに伴い減少していた。つまり，母親は子どものふりの発達が未熟な場合には，積極的な働きかけを行い，その後，子どものふりの発達に応じて，自らの働きかけを補助的なものに変化させていることが示された。

しかし，研究 2 は，月齢における母子それぞれの行動の変化を検討したに過ぎない。そのため，厳密には研究 2 だけから，母親が子どもに応じてふりシグナルを変化させていたとは言えない。そこで，研究 3 では 18 ヵ月児，24 ヵ月児，30 ヵ月児の子どもを対象に，子どものふりを促すための要因である大人側の“ふりシグナル”が，実際に子どものふりに影響を及ぼしているかについて，ふりシグナルの有無を操作することで，要因を統制した実験的検討を行った。その結果，ふりシグナルは 18 ヵ月児，24 ヵ月児のふりの出現を促していることが明らかとなった。他方，30 ヵ月児になるとふりシグナルは子どものふりに影響しないことが示された。つまり，30 ヵ月児は，ふりシグナルの有無にかかわらず，ふりという状況を理解出来，ふりが出来ることが示された。

だが，研究 3 では，ふりシグナルの有無のみを操作したため，個々のシグナルの効果については検討できなかった。そこで，研究 4 では，子どものふりを促す具体的なふりシグナルについて検討した。また，これまでの研究 1 から研究 3 は，子どもが大人と一緒にいる状況下でふりを行っていたため，子どものふりが大人の即時模倣であった可能性が挙げられる。そこで研究 4 では，18 ヵ月児とその母親がふり遊びを行った後に，子どもが即時模倣では対処出来ないふり課題を実施することで，即時模倣の可能性を排除した。その結果，母子のふり遊び後に実施した 18 ヵ月児のふり課題の成績に正の影響を与えていたのは，母親のふりシグナルの中でも，ふり行動，オノマトペであることが示された。研究 4 の結果から，大人がオノマトペを用いることは，子どものふりの発達における非常に有効な働きかけであることが示唆された。

研究 1 から研究 4 を通して，大人のふりシグナルは，18 ヵ月児および 24 ヵ月児のふりを増加させていた。この結果は，24 ヵ月までは，大人による介入によって，子どものふりが促されるということを意味する。他方で，30 ヵ月以降になると，大人のふりシグナルがなくても，子どもはふりが出来ることが示された。つまり，乳幼児期のふりの発達について，大人からのふりシグナルを提示されることにより，子どものふりが促される段階（18 ヵ月から 24 ヵ月）と，子ども自らがふりの主体となり，大人のふりシグナルがなくても自発的にふりを行うことが可能となる段階（30 ヵ月以降）の 2 つの段階がある可能性が示唆された。30 ヵ月という月齢は，母子のふり遊びから，仲間とのごっこ遊びに移行する時期である。そのため，子どもが主体となったふりを展開する上で，母親が積極的に働きかけ行うのではなく，働きかけを減らし，補助的な役割へと自身の行動を変化させることにより，子どものごっこ遊びへの移行が円滑に行われることが考えられる。

また，日本語に特徴的にみられるオノマトペに関わる心理学的検討は，我が国から世界へと発信しうる貴重な研究テーマであることが指摘されている（吉村・関口，2006）。今後は，本研究で明らかとなったふり行動，オノマトペというふりシグナルを用いることが，他のシグナルを用いることよりも，実際に子どものふりを促すことが出来るか，さらなる実証的検討を行うことが望まれる。